

第1回未来へつなぐ持続可能なインフラマネジメントのあり方検討ワーキンググループ 委員からの主な意見

【A委員】

- ・（暗い話になりがちだが、）明るく活力ある方向へ考えていくことにしたい。

【B委員】

- ・インフラの自分ごと化や、住民自らが担い手であるという意識の醸成は非常に重要であり共感する。
- ・「橋を通行止めにする」という社会実験は、災害時のシミュレーションとしても活用でき有効なアイデアである。
- ・小学生期からインフラ（橋梁や上下水道など）に親しむプログラムは、今後も応援していきたい。
- ・シンポジウムは関心のある人しか集まらないため、伝え方や企画については工夫が必要である。

【C委員】

- ・国が進める「群マネ」（地域インフラ群再生戦略マネジメント）の方向性と県の施策は一致している。
- ・優先順位の指標は、機能面（緊急輸送道路、孤立リスクなど）と性能面、景観などをグループ化して整理すべきである。
- ・都市部と山間部ではインフラの事情が大きく異なるため、分けて考える必要がある。
- ・自治体単独での対応は人材・財政面で困難なため、県が市町村と連携してインフラマネジメントに取り組むことが重要である。
- ・インフラの自分ごと化においては、住民が「どこまでなら許容できるか」を見極めるポイントが非常に大切である。

【D委員】

- ・持続可能なインフラの維持管理・更新には地元の建設会社の力が不可欠であり、平時のうちに修繕工事を平準化することが必要である。
- ・「公共インフラニューディール計画」については、事前に建設業協会などを通して地元の建設会社にも相談・説明をしてほしい。
- ・地元の建設業者が、インフラの維持管理だけではなく、除雪や災害対応などエッセンシャルワーカーとして果たしている役割を県民に伝え、建設業の魅力や地位を高めることが必要であるという視点も持つべき。
- ・インフラが縮小していく中でも、明るい方向性を持ってうまく組み立てていく視点が重要である。

【E委員】

- ・優先順位をつける際には、交通量の数字だけではなく、通学や通院、子育ての送迎など生活者の視点や、災害時の避難・緊急輸送ルートとしての防災の観点も重要である。
- ・「橋のカルテ」を作成するなど、データを分析して現状の健全度や将来のリスクが見える化し、住民にわかりやすく示すことが大切である。
- ・専門的な情報をそのまま伝えるのではなく、「この橋が通れなくなると通学時間が〇分増える」といった

生活者の単位や言葉に置き換えて発信することが理解につながる。

- ・ 橋を通行止めにするなどインパクトのある取組みや親子で意識醸成するイベントなど、動きのある企画は映像としても取り上げやすく県民の関心を引きやすいのではないか。

【F 委員】

- ・ 人口減少や財政制約を踏まえ、既存インフラの維持・修繕によるライフサイクルコスト低減への方向転換に賛同する。
- ・ 全ての橋梁を更新するのは財政的に非現実的であり、今あるインフラを活かす維持・修繕へのシフトや、地域住民との合意形成を図った上で将来的に「架け替えない」という選択肢も検討すべきである。
- ・ 優先順位の指標として、富山市が実施している「橋梁トリアージ」の取組みが参考になる。
- ・ 通行止めなどのインパクトのある自分ごと化の企画は、市町村と連携（官官連携）して進めることでより多くの市民を巻き込める。

【G 委員】

- ・ 富山県人口が 2060 年に 60 万人台になるという予測があり、そこに向けてどのように私たちが動くべきか、ウェルビーイングな未来を残すために何をすべきかというところが今、行動として求められている。
- ・ 公共事業は「法・理・情」にかなう必要があり、客観的なデータ（事実）に基づきつつ、住民の感情（情）に配慮した合意形成が重要である。
- ・ 自分ごと化の取組みについては、例えば橋が劣化して使えなくなったら、橋に付随するライフライン（水道、ガス、通信など）も使えなくなる事実を分かりやすく示して、橋の重要性（生活とインフラが密接に関わっていること）を体感できるような試みがあればよい。
- ・ 橋の清掃ボランティアなど、市民が参加できる草の根運動的な活動を広めて、県民にインフラへの愛着を持ってもらう取組みが有効である。
- ・ 全国でもいろいろな思いを持って橋の清掃を行っている方がいるので、小規模でも良いので、そういった人を集めたサミットを行い、広げていければよい。

【H 委員】

- ・ これまでは、インフラを自分ごとにしなくても、誰かが補修や管理を勝手に知らないところでやってくれたり、不便だと思うところには勝手に橋がかかっていたりした時代であったが、これからは災害発生時だけでなくインフラの老朽化など、インフラ問題が否応なく自分ごとになる時代において、今の段階から住民がポジティブに「私のインフラ」と自分ごとに捉えられるような工夫が必要となっている。
- ・ 優先順位の評価において、子育て層の「送迎交通」のような様々な生活交通に、現在の評価方法が対応できているか議論を深めるべきである。
- ・ 災害時に建設業が果たす見えにくい役割を可視化し、若い人材に向けて土木という仕事の魅力を伝えることが重要である。
- ・ 橋を通行止めにする取組みを行う場合は、町内会や市の一部の学区など小さなコミュニティ単位で、どこを通行止めにしたら気になるか一緒に考えてもらい、小さな橋からやってみる方法もある。